

博士論文（要約）

トルコ共和国における宗教教育政策（1940 年代～1970 年代）：
宗教教育の再開から必修化まで

上野 愛実

トルコ共和国建国初期、ムスタファ・ケマル〔・アタテュルク〕(Mustafa Kemal [Atatürk], 1881–1938 年) はトルコ国民意識の形成と社会の変革を目指し、一連の改革を推進した。独立戦争においてトルコを勝利に導き、その国土を守ったムスタファ・ケマルは、共和国を樹立するや否や、それまでの宗教に依拠した社会制度を次々に廃止していった。彼や彼を支持した政治家たちは、政治や社会、個人の生活や慣習から宗教を排除することで国民にとって宗教の影響力が減退していくこと、それこそが近代化の達成だと考えていた。こうした改革の矛先は、教育の分野にも及ぶことになる。政府は 1930 年代末までに、小・中学校および大学において行われていた宗教教育をすべて廃止し、こうして公教育において宗教教育は行われなくなった。

しかしながら、アタテュルクが没しておよそ 10 年後の 1949 年、小学校に選択希望制の宗教教育科目「宗教科 Din Dersi」が設けられた。これを皮切りに、イスラームの専門教育、高等教育が再開され、1950 年代から 60 年代にかけて、中学校、高校にも宗教科が設置された。1982 年には、「宗教文化・道徳科 Din Kültürü ve Ahlâk Bilgisi」の名のもとで、小学校から高校まで、必修科目として宗教教育が行われるに至る。2002 年から 2019 年現在まで与党の座にある公正発展党 Adalet ve Kalkınma Partisi は、学校における宗教教育をさらに拡充している。本稿は、これらの発端となったアタテュルクの改革からの宗教政策の転換がどのようにして可能となり、アタテュルクの時代に廃止された宗教教育がどのような経緯を経て必修化されるまでに至ったのかを明らかにすることを目指すものである。

そのために、宗教教育のなかでも、導師・説教師養成コース İmam ve Hatip Kursu や神学部 İlahiyat Fakültesi といった専門、高等教育機関の開設の先駆けとなった、普通教育のための小学校、中学校、高校において行われる宗教教育を扱う。これにより、共和国初期から現代までの大きな流れを意識しつつ、20 世紀中葉のトルコ共和国における宗教をめぐる政治のあり方を検討することで、トルコ共和国の政教関係を再考する。そして、トルコの政教関係の基礎は、アタテュルク亡き後の 1940 年代に、共和人民党政権による政策転換の試みのなかで築かれたものであること、その後、1950 年代から 1970 年代にかけて宗教の政治利用が定着していき、1970 年代後半にはムスリムであることとトルコ国民性の親和性を説く思想が宗教政策に反映されていったことを論じる。

本稿の目次は以下の通りである。

序論.....	1
1. 本稿の課題.....	1
2. 研究史.....	5
i) トルコ共和国研究の潮流と宗教、政教関係に関する研究.....	6
ii) 教育政策と国民形成.....	14
3. 本稿の目的と構成.....	17
4. 史料.....	20
第1章：トルコ共和国の建国とアタテュルク時代の宗教政策.....	24
1. オスマン帝国からトルコ共和国へ.....	25
i) 近世オスマン帝国.....	25
ii) 近代国家化と教育改革：新式学校の設立.....	26
iii) アブデュルハミト2世による宗教の政治利用と青年トルコ革命.....	29
iv) オスマン帝国の解体とムスタファ・ケマルの台頭.....	30
2. トルコ共和国の建国と世俗化改革.....	33
i) 宗教的行為主体の排除.....	33
ii) 宗教の排除とライクリキの制定.....	37
3. 教育政策と宗教教育の廃止.....	40
i) 新しい教育制度と国民教育の拡充.....	40
ii) 宗教教育の縮小と廃止.....	43
小結.....	45
第2章：非宗教的な道德教育から私教育における宗教教育へ.....	47
1. 道德教育の模索.....	48
i) 共和人民党の政策転換と道德教育の要請.....	48
ii) 国民教育諮問会議における道德教育をめぐる議論.....	52
iii) 『トルコ人の道德信条』と道德危機の喧伝.....	56
2. 宗教教育自由化の構想.....	62
i) 宗教教育の再開議論と決定.....	62

ii) 宗教塾開校の決定と教本『ムスリム子弟の本』の出版.....	67
iii) 『ムスリム子弟の本』への批判.....	74
小結.....	78
第3章：公教育における宗教教育の再開と国家による宗教管理.....	80
1. 小学校への宗教科の導入.....	81
i) 共和人民党の方向転換：党大会における議論から.....	81
ii) 宗教教育の再開.....	87
a. 1948年2月の共和人民党党会議.....	87
b. 公教育における宗教教育の正当性.....	89
c. 宗教科をめぐる規定.....	92
2. 宗教教育再開後のライクリキをめぐる議論.....	95
i) 民主党政権下の宗教政策.....	95
ii) 宗教知識人からの宗教教育再開に対する批判.....	98
iii) 教育諮問会議での議論：宗教教育に対する法学者の見解.....	100
iv) 宗教教育をめぐる裁判：憲法学者エセンの敗訴.....	107
小結.....	110
第4章：宗教教育の拡大と宗教の政治利用.....	112
1. 中学校への宗教教育の導入.....	112
i) 宗教教育に関するメンデレス首相の演説.....	112
ii) メンデレスの演説への批判.....	115
iii) 宗教教育をめぐってなされた議会審議.....	117
iv) 宗教科に関する規定.....	125
2. 高校への宗教教育の導入.....	126
i) 1960年クーデタと新しい社会秩序.....	127
ii) 公正党政権の成立から高校への宗教科の導入へ.....	130
a. デミレル首相と宗教教育の方針.....	130
b. 高校への宗教教育導入を求める声.....	132
iii) 高校への宗教科導入の決定.....	137

小結.....	140
第5章：宗教科の教育内容.....	141
1. 宗教科の学習指導要領と教科書.....	142
i) 教育の国家管理.....	142
ii) 教科書の執筆者.....	145
2. 宗派教育としての宗教科.....	150
3. 国家への奉仕.....	161
i) 道徳規範.....	162
ii) 殉教.....	166
iii) トルコ性.....	169
小結.....	173
第6章：道徳教育の宗教性.....	175
1. 道徳科の設置過程.....	176
2. 道徳科指導要領の改訂.....	185
3. 道徳科教科書の内容.....	189
i) 教科書概要.....	190
ii) 教科書に見る宗教性.....	191
a. 「宗教と道徳」章.....	191
b. その他の章における宗教性の表れ.....	193
c. 民間出版社による教材.....	196
小結.....	198
結論.....	200
図.....	206
文献目録.....	212

本稿では、宗教教育が必修化されるに至るまでの経緯を、20 世紀中葉における公教育内での宗教教育の再開にまで遡って扱った。ムスタファ・ケマル・アタテュルクは、トルコ共和国を建国すると、宗教に関わる分野において抜本的な改革を行った。青年トルコ世代たる彼やその周辺の政治家たちは、科学とナショナリズムの融合を説く新しい「宗教」、すなわちケマリズムのもと、政治や社会から宗教とその担い手の影響力を排除することが、トルコ共和国の近代化に不可欠であると理解していた。その一環として、建国当初は小学校、中学校、大学で行われていた宗教教育を 1930 年代末までにすべて廃止した。そして、共和人民党の綱領に盛り込まれていたライクリキを、1937 年に国是とすることで、共和国の世俗化政策を正当化する根拠とした。

しかしながら、1938 年にアタテュルクが死去すると、徐々に、彼の急進的な政策に対する反発が表面化する。宗教について議論することははばかられていたため、当初、それは道徳の頹廃を喧伝するという形をとることになり、さらに、1940 年代半ばからは宗教教育の必要性が訴えられるようになった。共和人民党政権にとって国民の要望に応え、宗教教育を再開するためには大きな課題があった。すなわち、アタテュルクの世俗化政策を否定せずに、いかに宗教教育を導入するかという問題である。共和人民党政権内でそれは当初、公教育の外部で宗教教育を行うという構想に結びついたが、その後、ライクリキの解釈を読み替えることで公教育の内部において宗教教育を再開するという方向に移行していく。その背後には、複数政党制の導入に伴い、宗教的实践を望む国民の支持獲得のために宗教を政治利用する必要性が高まったという事情があった。こうして、1940 年代当初は、国家と宗教の分離を堅持する方向性が政権内部で優勢だったのに対し、1948 年以降、宗教の政治利用を容認しつつ、国家による宗教管理を目指す方向性がこれを上回っていく。

1949 年に小学校に選択希望科目として宗教科が設けられると、それは 1956 年に中学校へ、1967 年には高校へも導入されることになる。このように、1950 年代以降、宗教の政治利用により国民の支持獲得を目指す手法は、政権交代や軍事クーデタにもかかわらず継承され、公教育における宗教教育は宗教の政治利用の一手段として捉えられ続けていった。アタテュルクとともに革命の時代を生きた政治家たちが姿を消していくなかで、彼らが推進した世俗化は過去のものと思なされるようになっていき、もはやライクリキの政教分離の側面は強調されなくなっていく。

トルコ共和国政府にとって、教育は多民族からなっていた住民のあいだにトルコ国民意識を涵養するとともに、彼らを国家への奉仕へと向かわせる主要な手段のひとつだった。

1940年代以降の宗教政策には、共和国初期になされたさまざまな宗教規制を緩和し、国民の支持獲得を目指す側面と、宗教を通じて国家への奉仕や国民意識の形成を促進する側面の両方が狙いとして込められており、宗教科は前者を意識して導入された科目であるとともに、同科目の教科書には後者の側面も反映されていた。宗教科の教育内容は、イスラームの基礎的な教義を教えるものであったのと同時に、イスラームの観点から道徳的な行動や殉教といった信仰実践を国家への奉仕と結びつけて論じるものでもあった。さらにこうした傾向は、宗教科が教授される学年の範囲が拡大した1976年にトルコ国民の性質と結びつけて教育内容に取り入れられるようになり、こうして、トルコ性とイスラームの不可分を説くトルコ・イスラーム総合論は、国家イデオロギーとなる前から公教育の内容に反映されることになった。

他方、非宗教的な道徳教育を担っていた公民科と入れ替わりに、1974年、道徳科が必修科目として設置される。道徳科では、イスラームを根拠とした道徳が説かれると同時に、トルコ性との親和性を強調することで、公の場でのイスラームの表出を望まない人々にとっても、より受け入れやすい形でイスラームを描くという試みがなされていた。道徳科の前身たる公民科のなかで教えられていたのは世俗的な道徳であり、そしてそれがトルコ人の道徳として教授されていたのに対し、1976年刊の道徳科の教科書では、同時期に出版された宗教科の教科書において見られたのと同じく、トルコ性とイスラームの相互的な関係性が強調されていた。公民科の廃止と道徳科の開始は、トルコの公教育における道徳教育の転換を示しており、世俗性に依拠したトルコ国民像を実現するための政策の代わりに、トルコ人の国民性とイスラームを結びつける理解が教育政策に反映されるようになったのである。そして、それを後押ししたのが当時、草創期にあったトルコ・イスラーム総合論だった。

このように、アタテュルク後の共和人民党政権期の1947年から1948年を転換点として、政教分離から良心の自由の保障へというライクリキの解釈の変化をもとに、トルコ共和国の宗教教育政策の性格は、宗教の国家管理と政治利用へと方向づけられることになった。1949年に再開された宗教教育は、その後、教育範囲を拡大させながら、国民のあいだに定着していった。そして、1976年には、オスマン帝国末期のズィヤ・ギョカルプの思想を継承したトルコ・イスラーム総合論が宗教科および道徳科の教科書に反映されるようになり、これにより、ムスリムであることをその重要な構成要素とするトルコ国民像が教育政策に採用されていったのである。

1982 年、宗教教育科目が選択希望科目から必修科目となったこと、また宗教的少数派が権利を主張できるようになってきた時代状況により、アレヴィーをはじめ、一部の国民は宗教文化・道徳科が必修科目であることに反対の意を示している。2002 年から 2019 年現在まで与党の座についている公正発展党政権は、イスラーム内の少数派やこれまで認められてこなかった信仰を、国家が許容するイスラームの範囲に組み込むという手段を通じて、こうした反対意見を封じようとしている。さらに、2012 年からは、中学校、高校において、これまでの必修制の宗教教育科目に加え、選択制の宗教教育科目が導入されるなど、公教育における宗教教育はさらに拡大している。公正発展党は、その党イデオロギーから、共和人民党と対比される傾向にあるが、同党のこうした宗教教育政策の契機となった公教育における宗教教育の再開は、アタテュルク亡き後の共和人民党政権による政策転換の試みのなかでなされたものなのであり、一方、今日の宗教教育の発展は、軍事政権を含むその後の諸政権がその政策を継承した結果だと見ることができるのである。

本稿は、政策に焦点を絞ったことにより、1940 年代の共和人民党政権が、国是であるライクリキの解釈を、政教分離から良心の自由の保障へと、強調する側面を変化させたことで、宗教への積極的な介入を可能にするという、これまで明らかにされてこなかった、宗教教育再開の論理を明示することができた。また、本稿では 1940 年代から 1970 年代までの複数の政権を対象としたことで、1950 年代から 70 年代を通じて、世俗的な国民から宗教的な国民へと、あるべき国民像が変化していき、それは軍事政権により公的イデオロギーとされる前に、教育政策に取り入れられていたことを明らかにした。

トルコ共和国に関する通説的な語りでは、六本の矢に注目する議論に象徴されるように、アタテュルクがトルコ共和国の基盤をつくり、そうした基盤によって規定されたものとして、その後の時代を理解するという見方がなされる傾向にある。現代のトルコをアタテュルクの時代に直結しうるものとするこうした見方は、現代の政教関係の萌芽をアタテュルクの時代に遡及することによって、共和国初期に対する理解を歪めるとともに、その後の変遷を軽視するという結果につながっているように思われる。しかしながら、本稿で見てきたように、1940 年代から 1970 年代の宗教教育政策の変遷は、トルコ共和国の宗教政策のあり方がアタテュルクの没後の模索のなかで形作られていったことを示しており、建国初期と現代を直結させがちな理解を見直すための歴史研究の必要性を喚起している。